黒猫のおうて！

八奈川景晶

ファンタジア文庫

2854

CONTENTS

目次！

005 序章・最後の一手
011 一章・黒ネコ棋士
048 二章・懲りないネコの甘え方
084 三章・コスプレとシスコンと女子高生
116 四章・ゴスロリとネコ耳の魔力
149 五章・天才と天才
181 六章・将棋を指すという意味
208 七章・秘密
240 八章・棋譜を継ぐ者
281 終章・次の一手
293 あとがき

KURONEKO NO OUTE!

口絵・本文イラスト　ぎうにう
監修：日本将棋連盟　東竜門

序章・最後の一手

七手詰めか――八十一マスの戦場を凝視していた長門成海は一つ大きく息を吐いた。
同時に、ずっと熱を帯びていた額がすっと冷たくなった。急に肌寒くなり、シャツが汗でじっとり濡れていることに今さらながら気づいた。
激しく鼓動していた心臓が一気に脈拍を落とし、急降下した血圧に少しだけ目眩を覚える。
それまで酷使され続けた脳みそが、ついに休めるぞと身体の制御をほっぽり出して安息を得ようとしていた。
プロ棋士の養成機関である奨励会、その最高峰に位置する三段リーグの最終局――成海は長い戦いの着地点を迎えていた。
一局一局に命を削って臨み、命を捨てる覚悟で勝利をつかみ取ってきた。
そうして積み重ねた白星の数は十七個――そこにいま、十八個目が積み増されようとしていた。

三段リーグ全十八戦、全勝優勝――その大記録がすぐそこにあった。
だが成海にとって記録というものは二の次、三の次だった。
彼が追い求めるものは常に勝利だ。記録なんてものは、そこに後から勝手にくっついてくるだけのオマケである。
勝ちたい、強くなりたい、強い相手と指したい――将棋に対する純粋な渇望と欲求だけが彼の原動力だった。
次の手で投了だろうな――成海はそれまでのあぐらを改め、正座に戻った。
額の汗をぬぐい、右手を駒台に伸ばす。
その中から桂馬をつまみ上げ、打ち下ろす。
桂馬の利きが王将を狙う。相手の先手玉の周りに守備駒は少なく、逆に王将の退路を塞いでいた。この一手から数えて七手後、先手玉は詰み上がる。
終局を意識した成海は背筋を伸ばしてその時を待った。
一分、二分、五分――しかしその時は訪れない。
負けました――その一言が聞こえない。
これ以上、指し続けても棋譜を汚すだけではないか――そんな疑問が浮かんだ。
将棋指しが残せる最大の財産が棋譜だ。

自分がどんな手を指したか、相手がどんな手を指したか、そのすべてが記録され、保存される。
だから将棋指しは自らの敗北を悟った時、自ら負けを認める。
自分の王将が詰まされてしまう前に、自分から首を差し出すのだ。
敵兵に首を討ち取られるくらいなら、切腹して果てようとする武士のように。
ゆえに自玉が詰まされるまで指し切ることは、ほぼない。その手前で投了する。
それなのに――成海は不思議に思って顔を上げた。
いや――上げようとして、止めた。その前に相手が着手し、玉将を逃がしたのだ。
成海はもう一度だけ盤面に視線を落とした。
間違いなく詰んでいる――簡単な五手詰めだった。アマチュアでも容易に気づく詰み筋だ。紛れる要素はどこにもない。
なぜ指し続けるのだろう――成海は純粋に理解できなかった。
ミスを期待しているのか。反則を期待しているのか。
それとも――単に諦めきれないだけなのか。
成海は改めて顔を上げて対局相手を見た。
前傾姿勢で将棋盤を覗き込んでいて表情は見えない。

ただその両手は、畳の上でぎゅっと握りしめられていた。
どういうつもりか知らないけど勝ちは勝ちだ――成海は再び右手を駒台に伸ばした。
手にした歩兵を相手玉の頭にたたく。
しかし、やはり相手は投了しなかった。
しばしの考慮を入れて、打たれたばかりの歩兵を王将で払う。
こいつっ――小さな苛立ちを覚えた成海は間髪をいれず、駒台の角行を盤上にたたきつけた。
これで三手詰めだ。
もう将棋初心者でさえ数秒で負けを悟る局面を迎えている。
どこにも逃げ道はない、三手後の詰みはどうあっても揺るがない。
これでどうだと成海が見上げる中、その眼前に伸びてきた指は王将を一マス下へとスライドさせた。
成海は我が目を疑った。一手詰めだぞ――と。
これからプロを目指そうという者が、こんな棋譜を残してなんになるというのか。
睨み付けた視線の先では、大きく身を乗り出した対局相手が盤面を見つめていた。
やはり先ほどと変わることなく、やはり表情はうかがえない。

成海はそれまで落ち着いていた心臓が再び激しく脈打つのを感じた。
戸惑い、怒り、疑問、焦燥――いろんな感情が渦巻いて彼の心をかき乱した。
ゆえにそれらを振り払うかのように、成海は最後の一手を指した。
正真正銘の詰みの一手、どうあがいても次のない一手だ。
どうだっ――成海が血走った眼差しで対局相手を射貫く。
三度、彼の目に映った姿は――やはりさっきと同じだった。
さあ戦おうじゃないかと意気込むように前のめりで、じっと盤上を見つめて。
ただ――握りしめられていた両のこぶしからは、力が抜けていた。
そうしてしばらく時が流れたのち、今度こそ『負けました』の言葉が成海の耳に届いた。
深々と頭を下げたまま自らの敗北を認め、そして顔を上げた。
その時になって初めて、成海は自分の対局相手の顔を見た。
そこで目の当たりにした表情に――成海はすべてを悟った。
いや、すべてを思い出した。
この対局の意味を。相手が最後まで指し続けたことの意味を。
そしてすべてを理解した時――絶望した。

―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―

この日、史上初の奨励会三段リーグ全勝突破という大記録が刻まれた。
そして同時に、偉大な記録を打ち立てた次代の天才は――将棋界を去った。

一章・黒ネコ棋士

カーテンの隙間から差し込んできた陽射しに、眩しさを覚えた成海はまぶたを開いた。
ぼんやりとした視界で時計を探すと、午前十時の少し前だった。
「なんだ……まだこんな時間か……」
成海は陽射しから顔を背けるように寝返りを打った。もう一度、まどろみの中に意識を落とそうとする。
将棋界から遠ざかって一ヶ月と少しが経ち、四月を迎えていた。
世の中が新しい季節に心を弾ませる中、成海はまるで真逆の生活を送っていた。
昼前にのっそりと起き出し、たれ流しのテレビ番組を眺めながらぼんやりと無為な時間をすごす。腹が減ったらコンビニに行き、ジャンクな食料を買い込んで空腹を満たす。
つまりはニートだった。
つい一ヶ月前までは神童、天才と賞賛された少年は、見る影もないほどに堕落していた。
かつては部屋の中心に鎮座していた将棋盤も、今は押し入れの奥で埃をかぶっている。

（そろそろ引っ越さないとな……）

ひなた荘――ここが成海の住処だった。

築二十年を超えるアパートで、周囲に真新しいマンションやアパートが建設される中、取り残されるようにひっそりと佇んでいる。他の住人と会ったことはない。

その二〇三号室が成海の住処だった。八畳と六畳の部屋が一つずつ、それにトイレと風呂があるだけのシンプルな造りだ。奨励会の対局に通いやすいように両親に借りてもらった部屋である。もちろん家賃も払ってもらっている。

プロ入りを決めながら引退した成海に対し、時間が経てば考え直してくれるはずだと、そのまま住み続けることを許してもらっていた。

しかし、そんな気遣いが成海には重荷だった。

かつて将棋のことだけ考えていた時には想像もしなかったことだが、こうしてニートな生活を送っていると、自分がいかに両親の負担となっているかを実感してしまった。

古いアパートだけあって決して家賃が高いわけではないが、しかし将棋を止めた自分が両親のすねをかじり続けるわけにもいかない。

新しい一歩を踏み出さなければ――頭では分かっているのだが、これが難しい。

将棋しか知らない人生を歩んできた成海には、将棋を指さない自分というものがどうにも扱いづらいのだった。

「……寝れない」

そんなことを考えているものだから、二度寝にしけ込もうとしていたのにすっかり目がさえてしまっていた。

そうこうしているうちに、ぐぅとお腹が音を鳴らした。

「起きるか……」

身体を起こし、クシャクシャのシャツを脱ぎ捨てた。

外出するのに最低限の身だしなみを整え、ぺしゃんこの財布を手に玄関へ向かう。

そうしてドアノブに手をかけた時だった。

コンコン――ドアがノックされる音が聞こえた。

成海は反射的に息をひそめた。

（連盟の人……じゃないよな……）

奨励会を去ってすぐの頃は、思い留まらせようとする大勢の将棋関係者の訪問を受けていた。

将棋連盟の偉い人、現役のタイトルホルダー、引退した大御所、若手のホープ――それはもう次から次へと説得を受けたものだった。

しかし成海の決意が固いと分かると、いつしか静かになっていたのだ。最後まで粘ってくれたのは師匠だったが、それも成海の決断を覆すには至らなかった。

コンコン――ドア一枚挟んだ向こうから再びノックが聞こえた。

このまま静かにしていれば留守と思い込んで帰ってくれるだろう――成海は無視を決め込むことにした。

したのだが――

『ぐるぅ……』

空腹を訴える抗議の声が予期せぬ大きさで響いていた。

それはもう、ドア一枚くらいでは遮れないほどに。

まさかの頓死だった。

「い、いらっしゃるんですよね……？」

成海の在宅を確認する声は、少女のものだった。

こうなったら仕方ないと、成海はドアを開けた。

少女ということは、今度は女流棋士が説得に来たのだろうか。そんなことを考えながら彼が目の当たりにしたのは――

「ご、ゴスネコ星から来ましたにゃあ……迷子なんですにゃあ……」

白と黒のふわふわゴスロリ衣装にネコ耳のカチューシャをつけ、今にも火を噴きそうなほど顔を真っ赤にした少女だった。

凝った刺繍入りのバッグを肩にかけ、厚底ブーツで足元を固めている。白いレース生地のストッキングに、胸元や耳元には煌びやかなアクセサリーの数々――どこから見ても立派なゴスロリだった。

「……」

「……にゃ、にゃあ？」

可愛く小首を傾げて見せる少女を、冷たい成海の視線が貫く。

乾いた空気が流れること数秒、成海はゆっくりとドアを閉めた。

「にゃーっ!?」

「なんの勧誘か知らないけど、行くならもっと金がありそうなやつのとこに行けよ。無駄遣いできる余裕なんてないんだよ」

「違います違います！　ふざけてごめんなさい許してください！」

素に戻った少女が焦ったようにドアをたたく。

それでも成海は関わらないでおこうと無視を決め込む。
「泣き落とされても金がないんだって……」
「将棋を教えてもらいに来ました、長門成海四段！」
必死の叫びに、成海の胸に一つの疑問が芽吹いた。
「将棋を……教えて、だと……？」
自分を説得しに来たのではないのか。連れ戻しに来たのではないのか。
将棋を教わりに来たなんて、そんなことを言ってきたのは初めてだった。
「あの！　本当にお願いします、中に入れてください！　もうわたし、恥ずかしくて恥ずかしくて……っ!!」
切羽詰まった悲鳴が漏れ聞こえてきた。
成海は渦巻く疑念にはとりあえず目をつむり、ドアを開けた。
「あぁっ！　ありがとうございます！」
胸の前で両手を組んで感涙する少女を、成海はじっと観察した。
背は自分より頭半分ほど低い。顔の造りは幼く、小さく慎ましい桜色の唇に細く整った眉、つぶらな大きな瞳はうっすら潤んでいる。
見るからにおとなしそうな印象だった。間違っても他人の家にコスプレして乗り込むよ

うには思えない。
「と、とりあえずお邪魔します！」
一刻も早く身を隠したいのか、少女はドアの隙間を押し開くようにして身体をねじ込んできた。
「はふぅ……これで見られずにすみます……」
ほっと胸をなで下ろした少女が土足のままフローリングに上がっていた。
だが成海にとって問題はそこではなく、なぜにゴスロリネコ耳少女が訪ねてきて、しかも将棋を教えてくれなどと訴えてきたかだった。
「おい、おまえ……」
「あ、すみません！　靴も脱がずにわたしったら……」
少女は申し訳なさそうに靴を脱ぎそろえると、成海の方を向いてちょこんと正座し、ピンと背筋を伸ばした。
「将棋のご指導、よろしくお願いいたします！」
「いや、そういう挨拶は置いといてだな。そもそも誰だよ？」
「あ、ご挨拶もせずに……。初めまして、三河美弦といいます」
そう名乗りながら深々と頭を垂れた。その名前には聞き覚えがあった。

そう、まだ奨励会員だったころに――

「……おまえ、女流棋士の三河美弦……？」

「わっ！　知ってもらえているなんて光栄です！」

ゴスロリネコ耳少女こと、三河美弦女流三段は感動したように笑顔を咲かせた。

ひなた荘の二〇三号室には奇妙な空気が漂っていた。

かたや、ぼさぼさ頭の冴えない少年がベッドに腰掛けている。

かたや、コスプレ女流棋士が正座して少年を見上げている。

かたや、釈然としない難しい顔をしながら。

かたや、期待に胸を躍らせながら。

「えっと……」

「はい、なんでしょうか！」

成海の声かけに美弦は食い気味に反応した。

三河美弦――若干十六歳にして女流三段の実力者だ。女流棋戦での勝率は七割を超えていて、タイトル挑戦まであと一歩と迫ったこともある。

女流棋界でも十本の指に入るだろう。

そんな彼女がなぜ――ゴスロリでネコ耳なのだろう。
「いろいろと聞きたいことがあるんだが……」
「もちろんです。なんなりとお尋ねください。私の得意戦法ですか？　詰め将棋の実力ですか？」
「なぜ、そんな格好をしているんだ？」
当然、最初の質問はそこである。
「それは……。お姉ちゃんに言われて……」
美弦が恥ずかしそうに俯く。
「お姉ちゃんって……」
彼女の姉も女流棋士だったと成海は思い出した。
顔までは思い出せないが、名前は確か三河美夏――姉と妹を合わせてナツル姉妹と呼ばれて話題になったはずだ。
姉の方は女流タイトルも保持する実力者だったはずである。
だがそんな姉とコスプレにどんな関係があるのだろうか。
「お姉ちゃんに『男の部屋に行くならこの格好をしていけばイチコロだ！』って言われて、それで……」

心なしか、飾り物のはずのネコ耳がしゅんと垂れた気がした。
「信じたのかよ。マジかよ……」
素直を通り越してこっちが心配になってしまった。
「だ、だって！　男の人の部屋に行ったことなんて、お父さんの部屋くらいしかないし、お姉ちゃんが自信たっぷりに言ってるし……」
「だからってな……」
「でもお姉ちゃんは正しかったです！　こうしてわたし、長門四段のお部屋に入れてもらえました！」
玄関前で今にも泣きそうな顔をされたら、追い返せるわけないだろう――いや待てよ。ひょっとすると、それすら織り込み済みでコスプレさせた可能性もある。
なかなかいやらしい手を指してくる姉だった。
「……まあいい。それじゃ次の質問だ」
「はい、どうぞ」
「どうして俺に将棋を教わりたいんだ？　おまえは現役の女流棋士で実力もある。で、俺は奨励会に所属していたことがあるだけの一般人だ。肩書きを見れば、あんたが俺に教わる理由なんてないだろ？」

独学で勉強するもよし。仲間と研究会を開くもよし。
もっと言えば、最も頼るべき存在――師匠を差し置いて他人に指導を仰ぐというのは、礼儀的にも問題があるのではないか。
「それは……ですね……。その……なんと言ったらいいか……」
美弦は視線を逸らして言葉を濁した。
言うか言わないかを迷っているというよりは、正直な思いを伝えるために言葉を選んでいるようだった。
焦れったくなった成海が口を開く。
「俺が三段リーグで全勝したからって理由か？」
「えっ……？」
驚いたように美弦が顔を上げた。
「そりゃ字面だけなら立派かもしれないけど、それだけで俺を頼るのは……」
「違います！」
美弦がずいと身を乗り出して成海に迫る。
「わたし、そんな記録に惹かれて来たんじゃありませんっ！」
心外だと憤慨する美弦の迫力に圧倒されて成海が後ずさる。

見た目はゴスロリでネコ耳だが、憤る彼女の顔は真剣だった。
「そ、そうか……。早とちりだった」
「いえ、わたしも怒鳴ってごめんなさい……」
お互いに頭を落ち着けて話を戻す。
「実はですね……わたし、男性棋士に勝てないんです」
「勝てない……。それはどのレベルで？」
「……全敗です」
美弦は自分の戦績について包み隠さずに打ち明けた。
男性棋士に勝てない――すなわちプロ棋士に勝てないということだった。
プロ棋士というのは奨励会三段リーグを突破した者であり、これまでその全員が男である。女性で三段リーグを突破した例はない。
そこで、女性への将棋の普及と奨励を目指して作られたのが女流棋士だ。
かつては実力差の大きかったプロ棋士と女流棋士も、近年はその差が狭まり、トップの女流棋士がプロ棋士を倒すことも珍しくない。
女流棋戦で好成績を収めている美弦であれば、プロ棋士に勝つだけの実力を持っていても不思議ではない。

だが、彼女はそのことごとくで敗北しているということだった。
やはり女流棋士ではプロ棋士に勝てない――そんな漠然としたイメージが、自分のせいで強まってしまうのは悔しいと、美弦は赤裸々に語った。
「だから……強くなりたいんです」
美弦の告白を成海は黙って聞いていた。
彼女の言葉の端々から勝利への欲求、敗北への恐怖、強くなりたいという貪欲さがあふれ出していた。
「……なるほどな」
そういうことなら、自分を頼ってくるのも分かると成海は納得できた。
打倒男性プロ棋士という目標なのに、男性棋士に教わるわけにはいかない。しかし女流棋士同士の研究では物足りなさを感じたのだろう。
ならば限りなくプロ棋士に近い棋力を持ちながら、プロ棋士ではない存在に教わりたい――つまり三段リーグに所属していたことがあって、今は一般人となった自分なら彼女の希望と合致する。
「将棋を……教えてください」
再び美弦は深く頭を下げた。

「……そっちの理由は分かった。だから次はこっちの理由を聞いてもらう」
美弦はそっと頭を上げ、次の言葉を待った。
「俺は将棋を止めた」
「はい、知っています」
「もう将棋は指さない。うんざりだ。嫌いと言ってもいい」
「はい……そう言われるかもしれないって覚悟してきました……」
「だったら、おまえのお願いに対する俺の答えも分かるよな？」
「……はい」
「はい、って……」
驚くほど素直に美弦は頷いた。それが成海には意外だった。
将棋を止めた理由、プロ棋士の資格を蹴った理由――とことん追及されて食いつかれると予想していたのに。
そう、かつて自分のもとに訪れた数多くの将棋関係者たちのように。
だが彼女は違った。純粋に教えを請うている。
純粋に強くなりたいと訴えてきている。
（こういうふうに言われるのは読みになかったな……）

どうしたものかと成海が頭を抱えていると、その沈黙を怖れた美弦が慌て気味に口を開く。

「せ、せめてわたしの棋力を見てくれませんか！」

「棋力を見る……？」

「はい！　わたしと指して将棋を教えるに値するかどうか、長門四段が決めてください！」

「なるほど……ね……」

彼女が将棋を指してくれと言っている。もう指すことはないと心に決めていた将棋に、向き合ってくれと言っている。

それが成海を悩ませた。

「ダメ……でしょうか……」

不安げに上目遣いで問うてくる美弦は、その格好も相まって、まるで飼い主を探し求める捨て猫のようだった。

否応なしに胸の奥をくすぐられるというか、どうにかしてあげたいという衝動に駆られるというか――将棋一筋で生きてきた成海とてそれは同じだった。

「……はぁ。分かったよ」

負けを認めた成海に、美弦はぱぁっと笑顔を浮かべた。

「ありがとうございます！　長門四段！」

「ただし三つ条件がある。一つ目は、最後に俺がどういう返事をしても受け入れること」

「はい、覚悟しています」

「二つ目は、俺が断りの返事をしても、それを引きずらないこと」

「引きずるって……どういうことですか？」

「俺が断ったせいで勝てなくなったとか、スランプに陥るとか、そういうことには絶対にならないことだ」

「えっと……それが条件なんでしょうか……？」

美弦が首を傾げるのも当然だった。

自分が勝てなかろうが、スランプになろうが、それは成海にとっては無関係のことだ。指導を断ったのなら、なおさら気にすることではない。

それなのに彼はなにを心配しているのだろう――そんな疑問が浮かぶばかりだった。

「まあ、そんな顔になるだろうけどな」

予想していたとはいえ、成海も丁寧に説明するつもりはなかった。

「とにかく、今日の対局の結果は今後のおまえの棋士人生になんら影響を与えない……それを約束しろ。いいな？」

「わ、分かりました！」
腑に落ちない美弦であったが、今はただ呑むしかなかった。
「よし、それじゃ三つ目だが……」
「はい、なんなりとおっしゃってください、長門四段！」
「……それだ」
「えっ……？」
「俺はプロじゃないし、奨励会員でもない……」
ポカンとする美弦を尻目に、成海は押し入れの中から将棋盤と駒箱、そして駒台を引っ張り出した。
「だから段位で呼ぶな。息苦しい」
そう言いながら部屋の中央に置いたのは脚付きの六寸盤だった。プロ棋士の公式戦で使用されるような将棋盤よりはやや厚みが薄く格が落ちるものの、個人で所有するには十分すぎる一品である。
「いいな？」
成海は将棋盤の前にあぐらをかくと、盤上の埃を軽く払い、駒箱の中から駒を広げた。
「は、はい！　長門さんっ！」

答えた美弦が将棋盤の前に正座した。
「立派な将棋盤と駒ですね……」
「なんならくれてやるぞ？　可燃ゴミか不燃ゴミか粗大ゴミか、分別が分からなくて捨てなかっただけだからな」
「そんな捨てるなんてっ！　もったいないです！」
「俺にはもうどうでもいいものなんだよ。ほら、並べろ」
成海が密集した駒の中から王将をつまみ上げ、配置する。それを見届けた美弦が今度は玉将を自陣に置く。
その後はつつがなく駒の配置が終わった。
美弦がマス目にそってきれいに駒を並べたのに対し、成海の駒は『ただマス目の中に置いただけ』という感じで乱れていた。
「さて……先手と後手、どっちがほしい？」
「振り駒じゃないんですか？」
「公式戦じゃないんだ。これはおまえの棋力を見るための対局なんだからな。堅苦しく決める必要はないさ」
「じゃあ……先手を」

「よし。持ち時間はそれぞれ一時間、切れたら一手六十秒でどうだ」
成海が対局時計をセットする。
持ち時間の多寡というのは、勝負を左右することもある。
じっくり考えれば優勢になるチャンスに、時間が足りずに悪手を指して一気に敗勢になることなんてざらだ。
今回の持ち時間は短時間の部類に入る。時間の使い方も勝負の結果を左右するだろう。
「だ、大丈夫です！」
「ん……いくぞ」
「よろしくお願いします！」
かくして、成海はゴスロリネコ耳少女と一ヶ月ぶりの将棋を指すこととなった。

―・―

勝負は成海の居飛車、美弦の振り飛車で始まった。
居飛車はひたすら攻撃を意識した戦法、振り飛車は相手の攻撃に乗じてカウンターを目指す戦法である。

もっぱら居飛車党、振り飛車党と大別される。
つまり振り飛車を選んだ美弦は、成海に攻めてきてくださいと暗に誘っているのだ。
（さて……）
成海は船囲いに組んだ。これは居飛車における玉将の囲い方の中で、最も手数がかからずに組める。そのぶんの手数を攻めにかけることが可能だ。
その一方で囲いの守備力は低いのが難点である。
一方の美弦が選んだのは四枚美濃囲いだった。金将と銀将の連結に優れ、抜群の守備力を誇る。囲いに駒を使うぶんだけ攻めは細くなるが、そもそもカウンターを狙っているので、守備を重視するのは理にかなう。
しかし成海としては、あまりにも守備的すぎるという印象をぬぐえなかった。
（ここまで徹底的にカウンター狙いとはな……）
相当に自信があるとうかがえる。きっとこの戦法で勝ち星を稼いできたのだろう。
（だが、それも男性棋士には通じなかった……と）
ここまでの彼女の指し回しにミスはない。
つまり彼女が抱える問題は、この先にあるということだ。
（……たとえば、こういうことか？）

成海は駒を後退させた。自分からは攻めず、美弦の攻めを誘った。
あえて自玉の囲いを崩し、駒の配置を不効率にし、美弦が攻めやすい局面を作った。
しかし――美弦は動かなかった。
自陣の駒を細かく移動させるだけで、隙を見せる成海陣に牙を剝くことはなかった。
（そうか……それがおまえの棋風か……）
成海は美弦の将棋の本質を見抜くと同時に、彼女がプロ棋士相手に勝てない理由に察しがついた。
（さて……もう様子見は必要ないな）
成海は一転して攻勢に転じた。自玉の囲いが不安定なまま、美弦の誘いに乗って攻撃を仕掛ける。
さあカウンターだ――美弦が息を吹き返して前のめりになった。

それからわずか三十手後、美弦は投了を告げていた。

―・―・―・

地力の差を見せつけられての結果だった。
（これでこいつも諦めるだろう……）
美弦は自分の将棋を見てから指導するかどうか決めてくれと訴え、わざわざ注文通りの展開にしてもらって、その上での敗北である。
教わるに足る実力がない、と自覚するのも当然だろうと成海は高をくくる。
「さて、ここまでだな」
成海が駒台に乗っていた持ち駒を盤上に乱雑に放り投げ、腰を上げる。
「……あ、あの！　もう一ついいですか！」
そんな彼を制して美弦が声を上げた。
「長門さんが囲いを崩して駒を組み直していた時に、こちらから仕掛けていたらどうしましたか？　たとえば、こうやって……」
美弦は序盤の局面に駒を並べ直すと、四枚美濃の堅守を崩して攻める手を見せた。
それはまさしく、成海が美弦を試そうとしていた局面だった。
「……困ってた。そっちは少しくらい守りが薄くなっても、それでも俺のバラバラな陣形より堅い。相当に苦労しただろうな」
「やっぱり……。迷ったんです。でも長門さんに誘われている気がして……」

「誘ってたよ。乗ってくるかどうかを見たかったんだ」
「じゃあ、もしわたしがこうやって攻めたら……」
「そうだな……。苦しいけど、こうかな……」
二人は駒を動かしながら、美弦の幻の攻撃を検討する。
「こうやって、きっと歩で合駒してくるから、その裏から香車を打って……」
「仕方ないから早逃げかな。駒損になるけど、反撃含みで歩を伸ばしておく」
「それならこっちに桂馬を置いておきます。次に銀が取れれば両取りがかかります」
「ぬ、ぬう……」
（こいつ……完璧に攻め将棋じゃないか……）
振り飛車でカウンター狙いな美弦を、成海は受け将棋だと思っていた。
指し回しも応手も、受け将棋を得意とする棋士独特の粘り強さやしつこさがあった。
だが今の彼女はどうだ。
守ることを捨て、ひたすら攻めることしか考えない美弦の一手一手は、どこまでも鋭く厳しかった。
それこそ成海が答えに困ってしまうほどに。
そして攻めの手順を並べている時の彼女は――とても生き生きしていた。

「……なあ」
「は、はい？」
ネコ耳の位置を直しながら美弦が顔を上げる。
「なんで振り飛車やってるんだ？」
「えっと……最初に覚えたのが振り飛車だったので……」
「でも攻めるのが好きなんだろ？」
「は、はい……。でも、その……初心者は振り飛車から始めるのが良いって本に書いてあって……」
「しょ、初心者っておまえ……くくっ！」
成海は思わず笑ってしまった。
なんと愚直なことか。初心者は振り飛車から始めると上達が早い――確かにそうだろう。振り飛車の方が形が決まっていて、どう指せば良いか覚えやすい。
だがそれはあくまで初心者の話だ。上達するに従って他の戦法も指しこなさなければならない。ましてや女流棋士となれば、一つの戦法に固執していてはまず勝てない。
だが彼女は違った。
恐ろしいほどの初志貫徹で振り飛車を指して指して、指し続けてきたのだ。

そうして女流棋界で脚光を浴びるほどの棋力を身につけていたのだ。
「や、やっぱり変ですか？　実は公式戦でも振り飛車ばっかりで……居飛車を指そうとしたこともあるんですけど、怖くなって止めちゃってばかりで……」
「おいおい、マジかよ！」
気づけば成海は手をたたいて喜んでいた。
好きな攻め将棋を怖がって、慣れているからと受け将棋に徹して――こんなちぐはぐなことをやっていて、それで今の地位まで昇ってきたというのか。
「くっく……くははっ……」
「あ、あの～……長門さん……？」
ずっと陰湿な雰囲気を出していた成海のはしゃぐ姿に、美弦は目を丸くするしかなかった。
「あー、笑った笑った！　おまえ、天才だわ！」
「て、天才ですか？」
「そう。もう将棋は指さないって決めた俺の決意を揺るがすくらいの天才！」
「そ、それじゃ将棋界に戻るんですか!?」
「ん、それはない」

「はえっ!?」
成海のあっけらかんとした断言に、ぐっと身を乗り出していた美弦がこてっと崩れ落ちた。
「もう将棋に人生を懸けるつもりはない。もちろんプロ棋士になるつもりはない。これは今も変わらない」
これだけは揺るがない。揺るがせてはならない。
でも――
「今日だけ……一日だけ現役時代に戻ってやるよ」
この攻め下手な女流棋士の足枷を取っ払ってあげようではないか。
「それって……それじゃあ！」
ぱあっと笑顔を咲かせる美弦に、成海は改めて将棋盤の前に座り直した。
「ほら、おまえの読み筋を聞かせてみろ」
「はいっ！」

―・―・―・

かない」
「が、頑張ります！」
成海の激励に美弦が両手をグーにして応えた。
「こんなところか。もういいだろ？」
「ちょ、ちょっと待ってください！　もう一度、最初からおさらいするので！」
美弦は身体を前後に揺すりながら、盤上で初手から差し手を再現し始めた。
成海に与えてもらったこの機会を大切にしなければと、本局の骨の髄までしゃぶりつくす覚悟だった。
（それにしても、とんでもない一日だったな……）
ネコ耳をひょこひょこ揺らしながら没頭する美弦を前に、成海は改めて今日という日を思い返していた。
つい今朝まで、自分はいつ家を引き払って実家に戻ろうかと考えていたのだ。
目的のない日々をだらだらとすごし、なんの情熱も抱かずにただ暮らしていた。
それがどうだ。
ゴスロリでネコ耳な少女に急戦を仕掛けられ、しかも少女は名うての女流棋士だった。
反撃する余地も与えられず自陣に侵入され、あれよあれよという間に将棋を指すことに

なった。
そして気づけば、将棋を止めたはずの自分が将棋を教えている。
（まあ……これが最後なんだ。そういうこともあっていいさ）
今日だけはすべてを忘れることにした。
「うん……大丈夫です」
この将棋で考えるべきこと、見直すべきことはすべて吸収したと美弦が告げる。
「それじゃ、ここまでだ」
「はい！　ありがとうございました！」
美弦が深々と一礼して立ち上がる。
ずっと正座していたというのに、その足取りはしっかりしていた。
「それじゃあ失礼します！」
「おう……って、そのまま帰るのか？」
あまりに自然に美弦が部屋を出て行こうとするので忘れていたが、彼女はゴスロリでネコ耳なのである。
この格好で人目の多い中を歩くのは――なかなか勇者である。
「はうっ!?　そっ……そうでした……」

さっきまでのホクホク顔はどこへやら、一転して青ざめた美弦が苦悶する。
「ど、どうしましょう……？」
「おまえ……もっと将棋以外のことも気にかけろよな」
成海はクローゼットを開け、大きめのコートを取り出した。
「ほら、くれてやる」
「よ、よろしいんですか？」
「安物だ。気にするな」
どうせこの部屋も遠くないうちに引き払うのだ。引っ越しの荷物が一つ減る。
「ちょっと季節外れだけど、その格好よりは変な目で見られないはずだ。ネコ耳は外していけよ？」
「なにからなにまでありがとうございます！」
コートをしっかりと羽織った美弦が何度も頭を下げた。
「えっと……ありがとうございました」
「おう、達者でな」
成海は帰宅の途につく美弦を玄関まで見送り、なんとなく、その背中が見えなくなるまでその場でぼうっとしていた。

今日という日の特別な時間が終わったのだと、大きな満足感と小さな寂しさが胸の奥を漂っていた――

『ぐるるるるぅ』

静寂を打ち破るように成海のお腹が悲鳴を上げた。
「……そういや、腹が減ってたんだよな」
そもそもコンビニに行こうとしていたのだ。その矢先に美弦がやってきて、今までずっと将棋漬けだった。
将棋を指している時はすっかり忘れていたが、思い出したように激しい空腹感が襲ってきた。
食べ物を寄こすまで痛めつけてやる――胃袋からの抗議の声だった。
買い物に行こうと財布を取りに戻ったところで、感想戦を終えたままになっていた駒と将棋盤が目に入った。
「……また、捨てそびれちまったな」
成海は駒を駒袋に戻し、将棋盤と一緒に押し入れに戻した。

いっそのことあいつが持っていってくれれば踏ん切りがつくのに――そんなため息をもらしながら。

「さて、行くか」

玄関を開けて共用廊下を進み、カンカンと音を立てながら階段を下りる。

そこで前から来た人影とニアミスした。

「おっと……こんにちは、大家さん……の娘さん」

安芸茜――ひなた荘の大家の一人娘だった。

薄く茶色に染めた髪をポニーテールに結わえ、すらっとした肢体を軽く着崩したブレザーに包んでいる。

アクセサリーはあまり目立たない程度に少しだけ、でもしっかりとオシャレを主張していた。

いかにも今風の女子高生という出で立ちの茜は、急に姿を現した成海に驚いたように目を丸くした。だがそれも少しの間だけで、そのまま視線を逸らさず、成海をじっと見つめ始めた。

「俺の顔になにか……？」

これまで何度か挨拶を交わすことはあったが、こんなに真正面から顔を合わせたのは成

海も初めてだった。

年齢は同じ十六歳であるが、ちょっと前まで成海は将棋の奨励会員で、茜は若さを謳歌する女子高生だ。話や趣味が合うわけもない。

それなのに彼女は俺のなにが気になっているのだろう――成海にはまるで分からなかった。

そうしていると、茜がようやく唇を動かした。

「えっと……長門くん……」

なぜか頬を朱に染めて、気まずそうに視線を逸らしながら。

「あの……ウチにああいう人を呼ぶのは、ちょっと……」

「ああいう……？」

「えっと……部屋を借りてもらってるから強くは言えないけど、でも……」

もごもごしていた茜が意を決してその単語を口にする。

「と……特殊なデリバリーのお仕事をしているお姉さんを部屋に呼ぶのは……」

「……は？」

いや待てちょっと待て大いに待て――成海は茜の言葉に愕然とした。

ちょっと特殊なその職業のことは察しがつく。聞いたこともある。

だがそれだけだ。
そもそも結構なお金がかかるというではないか。そんなことに使えるお金は我が家のどこにもない。
「なんでそんなこと……!?」
「だって……昼間、女の子がすごい格好で……」
「……あぁ」
ゴスロリネコ耳娘に間違いなかった。
なにも事情を知らなければ、確かにそういう衣装でのデリバリーを頼んだように思われても仕方ない。
「あれは……その、なんと言えばいいか……」
彼女は有名な女流棋士で将棋を教わりに来ただけで、姉の甘言に惑わされてあんな格好になっただけなんだ――
（うん……説得力がゼロだ……）
とても疑いを晴らせる気がしなかった。
「そ、そういうことだからっ！」
どことなく怯えた表情の茜が足早に立ち去る。

残された成海には言いようのないモヤモヤだけが残った。
さっきまで大声で空腹を訴えていた胃袋も、今はすっかりおとなしくなっていた。
「……早く引っ越した方が良さそうだ」
肩を落とした成海は、人目を避けるようにトボトボとコンビニへ向かうのだった。

続きは、7月20日発売のファンタジア文庫で！

©Keishou Yanagawa, giuniu 2019